
高山村立高山中学校 2 学年 – 志賀高原ユネスコエコパークを知ろう

長野県高山村に位置する高山中学校 2 年生は、ユネスコエコパークの存在を地域の誇りとして再認識し、その構造や理念を深く学ぶとともに、自分たちの暮らしとの関わりについても考える探究活動に取り組みました。自然保護と地域の営みがどのように共存しているのかを自らの体験を通して探り、実践的な学びを深めました。

志賀高原の自然を肌で感じる現地学習

7 月には志賀高原に出かけ、ユネスコエコパークの「核心地域」「緩衝地域」「移行地域」の違いを自分たちの目で確かめました。核心地域では針葉樹が密に生え、落葉樹がほとんど見られない様子から、自然環境の厳格な保護が実践されていることを実感。特にヒカリゴケの幻想的な輝きや、光合成を行わないギンリョウソウの姿に、自然の神秘さと繊細さを感じ取ることができました。

ガイドの方から「石ひとつ動かしてはいけない」と聞いたときには、多くの生徒がその厳格なルールに驚き、自然と人との関係性を改めて考える機会となりました。

学校林を通じた地域とのつながり

高山中学校の学校林は、エコパークの緩衝地域と移行地域のちょうど境目に位置しています。児童たちはこの学校林の整備を進め、落ち葉や枝、松ぼっくりを集めて乾燥させ、村内の山田牧場にあるキャンプ場に提供しました。この資源は、火おこしの材料としてキャンパーたちに喜ばれ、地域外の人にも高山村や志賀高原の自然の魅力を伝える手段となりました。

この活動を通じて、「自然と共に生きる」ことを実践的に感じるとともに、自分たちの行動が地域の持続可能性にも貢献できることを学びました。

土壌調査から読み解く自然の状態

さらに、生徒たちは学校林の土を使って土壌動物調査を行い、自然環境の状態を数値的に評価する試みにも挑戦しました。調査では、さまざまな点数が割り振られた土壌動物（例：クモ、ミミズ、ムカデなど）を分類・集計し、総合点によって環境の豊かさを判断しました。保存状態の不備により最初の標本は失敗したものの、移行地域の土壌で再調査を行い、結果からは自然がまだ多様性を保っていることが確認されました。

未来への展望

学習を通して、生徒たちは高山村の自然が私たちの暮らしを支えていることを実感し、これまで「当たり前」と思っていた風景が、実は長い時間と人の努力によって守られてきたことに気づきました。今後は学校林のさらなる活用や、調査結果の比較研究にも取り組みたいという意欲が生まれています。自然を守り、次の世代に引き継いでいくために、自分たちにできることを模索し続けています。